



# 日本「アジア英語」学会 ニューズレター

No.3 (SEP. 1998)

## 《第3回全国大会 白百合女子大学で開催》



〈本名信行会長挨拶〉

### 第3回全国大会 プログラム

大会テーマ：アジア英語研究の最前線

総合司会：高本裕迅（白百合女子大）

9:30 受付

10:00 開会の辞：高本裕迅

会長挨拶：本名信行（青学大）

10:10 特別講演

～11:30 「マレーシア・シンガポール・ミャンマーの民族政策・言語政策・英語教育」

藤田剛正（常葉学園大）

11:30 会員総会

～12:00

12:00 昼食休憩

～1:00

1:00 研究発表 司会：高本裕迅

～3:00

1. 「アジア英語と学生の意識」

杉野俊子（防衛大学校）

2. 「地域協力機構における国際コミュニケーション：ASEAN（東南アジア諸国連合）の公用語としての英語使用をめぐる」

奥平章子（青山学院大学院生）

3. 「国際コミュニケーションのための英語教育—英語教育の現状分析と提言：「入試英語」の影響を中心に—」

松岡 昇（産能短大）

4. 「日本人英語の可能性—ランゲージ・マーケティングからのアプローチ」

平野順子（青山学院大学院生）

3:00 シンポジウム

～5:00 司会：秋山高二（山梨大）

「アジア英語研究の最前線」

フィリピン：本名信行（青山学院大）

シンガポール：田嶋宏子（白百合女子大）

タイ：竹下裕子（東洋英和女学院大）

中国：エリック・ベレント（清泉女子大）

5:20 閉会の辞：矢野安剛（早稲田大）

5:30 懇親会（於：学生ホール）

## 大会をふりかえって

高本裕迅（白百合女子大）

第3回JAF AE全国大会は、「アジア英語研究の最前線」をテーマに6月27日（土）に開催された。第1回全国大会（於青山学院大）での誕生からちょうど一年を迎えた。学会が誕生する半年ほど前、たまたま本学に本名氏をお招きし、アジア諸国における英語の実情について講演をしていただいた。氏の興味深い持論の展開に、学生達は目を輝かせていた。彼らの潜在意識を刺激してくださり、アジア英語の種をまいてくださった本学で、3回目の全国大会が開催される運びとなったのはいわば「奇しき縁」とでも言えようか、その間の学会の発展に感慨の念を禁じえない。

今大会は、開会の辞、本名会長からの挨拶に引き続き、藤田氏による特別講演を頂戴した。マレーシア、シンガポール、ミャンマーの民族政策や言語政策などについての長年の研究成果による詳細な資料に基づき、また氏のお人柄を思わせる丁寧なお話であった。

続く会員総会は事務局の田嶋氏の進行により、理事等の選挙規定、会則変更、会計報告

などが報告あるいは提案審議され、それぞれ了承された。中でも特記すべきは、学会紀要『アジア英語研究』の発刊についての発表で、投稿規定が詳細に説明された。会員諸氏の積極的な応募により、学会が更に活性化されることが大いに期待される。

午後の研究発表では、大会プログラムにあるように多角的な視野からの成果が披露された。杉野氏は、言語モデルなどに関する調査結果を踏まえ、アジアの一員である日本の英語教育の在り方を実証的に問いかけた。平野氏は、経営学の概念を言語学に応用し、いわば言語の消費者である言語使用者に関して消費者主権を基盤とするマーケティング理論を導入した、大変興味深い発表をした。また、奥平、松岡の両氏もそれぞれ示唆に富む発表であったが、詳細は別項を参照されたい。シンポジウムでは、竹下、ベレント、田嶋、本名の四氏が発表した。フィリピン、シンガポール、タイ、中国の四ヶ国に関して、言語政策や教育政策あるいは言語使用の実態など各提案者が得意とする分野を中心に最新情報を交えて紹介し、活発な質疑応答を誘った。

大会は、矢野氏のユーモア溢れる、しかも今後の学会の方向を見据えた閉会の辞によって締めくくられたが、氏のご挨拶を聞きながら、本学会がますます担うことになる社会的な任務と責任の大きさを改めて感じたのは私だけであろうか。(大会実行委員長)

## 藤田剛正氏特別講演

源 邦彦(青山学院大学院生)



〈藤田剛正氏〉

本講演で藤田氏は、マレーシア、シンガポール、ミャンマー各国の民族政策を辿ることで、その言語政策、英語教育への影響を示そうとした。以下、藤田氏の展開した論をその

共通性という点から分析し、本学会にとってどのような示唆があるかを明示したい。

まず第一に、三カ国とも、旧英植民地であったという点である。アジア、アフリカを含め旧植民地国では、帝国言語が行政、エリート教育のメディアムとなり、少数エリート、特定民族の特権言語となったが、まさにこのような状況が三国に見られる。

そして第二に、シンガポールを除いては、独立後はナショナリズムによって特定集団の言語が公用語化され、英語、その他少数言語が追いやられるという事態が生じたという点である。ただし、英語を最重要言語と位置づけたシンガポールでさえも、英語の普及によって生じうる結果が憂慮された。三国を含めアジア、アフリカ旧植民地国では、公的領域など比較的施策の実行性が高い領域で、旧帝国言語から土着語に移行する試みがなされた。ただし、科学技術など近代社会が要求する高度な専門語彙が土着語に不足していたため、専門領域では旧植民地語に取って代われないという事態に陥った。

第三に、経済開放、市場競争激化など経済その他のさまざまなグローバリゼーションによって、再び英語の最重要視化がなされたという点である。確かに、英語の普及に伴う文化侵略など憂慮される面はあるが、言語のイデオロギー的側面はさることながら、なんとかその実利的側面も認知しようという動きが見られる。

まさにこの第三の点こそが、アジア英語を考える上で、今日我々が抱え、将来的に見据えていかなければならない問題だと思われる。つまり、言語政策、英語教育政策は以上指摘した三点からわかるように、常に社会構造、社会変動と連動しており、時代の流れにそくしてパラダイムを転換して捉えていく必要がある。アジア英語の今日的課題かつ将来的展望を考えるにあたり大切なのは、歴史が未来を縛るのではなく、歴史を踏まえた上での現在が未来を開放しなければならないという視点なのである。そんな警鐘が藤田氏によって鳴らされたような、大変有意義な講演であった。

## 【研究発表概要】

### 地域協力機構における「国際コミュニケーション」：ASEAN（東南アジア諸国連合）の「公用語」としての「英語」使用をめぐって

奥平章子（青山学院大学院生）

本発表では、現代の地域統合化の中で、地域協力機構における国際コミュニケーションの為の共通言語問題を考える上で、現在インドネシア、シンガポール、タイ、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、ベトナム、ミャンマー及びラオスの9カ国で構成されるASEAN（東南アジア諸国連合）を事例に取り上げた。

ASEANは1967年の設立以来、英語が唯一の公用語となり得てきたが、何故同機構では全組織・運営を英語一言語で可能にしてきたのか、その外在的及び内在的要因を探ってみた。

言語を異にする国々から成る地域協力機構の代表例に、この他EU（欧州連合）があるが、EUでは加盟15カ国の言語（言語数の上では11言語）が全て公用語として明文化された政策がとられ、通訳や翻訳実施の為の相当額に上る経費及び労力がシステムに組み込まれている。更に185の加盟国から成る国際連合では、6言語が公用語に指定されているが、同公用語をめぐって数々の論争が発生している。即ちEU及び国連の共通点は、公用語関連の様々な論争が繰り返されてきたことにある。

ASEANも多様な言語背景を持つ機構としてEUとも国連とも共通するが、ASEANの特異点は公用語が英語に統一され、しかも発表者の行ったASEAN中央事務局（在ジャカルタ）での調査によれば、言語に関する論争の記録は皆無であり、且つ公用語を英語に規定する記述も一切存在しない。ASEANには設立当初より加盟国間に文書化するまでもなかった、公用語としての英語使用を「当たり前」とする「英語観」が共有されていたと考えられる。発表者のASEAN関係者への聞き取り調査によれば、マレー語やフランス語の第2公用語化の提案も過去にあったが、議論に持ち込まれるには至らなかった。また英語使用に関わる問題点は、旧仏領新加盟国の英語力に関するものに集中し、対策として様々なトレーニング・プログラムが提供されている。ASEANにおける英語使用の外在的要因として概ね：1)財政的節約 2)労力の節約 3)通訳を介

さない直接対話 4)平等性 5)域外との関係 6)広範囲にわたるASEAN関係者 7) コンピューターと通信の7点が挙げられる。また内在的要因として上述の「英語観」がある。この英語観形成の背景には歴史的境遇が有力となるが、更に重要なのがASEANの内在的性質、即ち「ASEAN性」である。これは上述の文書化されない合意のような非言語性の強いものである。今後の課題はASEAN性の究明にある。

### 「国際コミュニケーションのための英語教育—英語教育の現状分析と提言：「入試英語」の影響を中心に—

松岡 昇（産能短大）

戦後日本の英語教育は、文部省の学習指導要領に基づけば、一貫して「聞く、話す、読む、書く」の4技能の育成を目標として今日までなされてきたことになる。この目標は、国際化社会という時代の要請と方向性を一にするものであり、何ら問題点は見当たらない。しかし、この教育の結果、英語の4技能、すなわち音声と文字によるコミュニケーション能力が日本人に培われてきたかという点、概してその評価は否定的である。

この英語教育の「失敗」の背景にはさまざまな問題が考えられるが、とりわけ、「大学入試英語」の影響はその重大な要因のひとつとして看過することはできない。この「入試英語」（1997年度実施のセンター試験を含む22件のサンプル）を分析すると、次のような問題点が指摘される。まず、コミュニケーション能力（特に「聞く」「話す」「書く」能力）の審査が極端に不足していることである（問題数による分野別比率：読解56%、作文14%、聴解3%、発音6%、文法5%、語彙・熟語16%）。次に、アジアをはじめ、世界で広く使われている「国際語」の基準から見れば、「入試英語」は過剰に厳密でかつ高度な知識を要求していることである（難解な読解文、用法、語彙・熟語など）。こうした「入試英語」は高等学校以下の英語教育に直接的ないし間接的に影響し、特に高等学校におけるコミュニケーション能力育成の指導を執行困難にしている。これらの問題は、試験の性質上、すべてが容易に解決されるとは思われないが、実現可能な改善策は少なからずある（松岡、1997）。試験者はこのような問題を早急に解決する社会的責任がある。

しかし、「入試英語」さえ改善されれば日本の英語教育の問題は解決される、とするのはやや楽観的すぎる。教育を行う側（教師、教材作成者、教育行政者）にも求められる改善点も少なからずある。いずれの側の改善においても、その核には英語観のシフトが必要である。従来「英語をイギリスやアメリカの民族語」として捕える見方から、ことばや文化の異なる世界の様々な人々（85%が非母語話者）が交流するためのことば、すなわち「国際語」として英語を捕える英語観のシフトである。この英語観のシフトこそ「国際コミュニケーションのための英語教育」を実現させる鍵である。



〈学生ホールでの懇親会〉

## 全国大会に参加して

米山優子（一橋大院生）

昨年同様に晴れあがった夏空の下、記念すべき第一回全国大会当日の暑さを思い出しながら会場へ赴かれた方もいらしたことだろう。三回目を迎えた本大会では、専門性に富んだ多くの報告の中でも、東南アジア諸国連合（ASEAN）の英語使用に関する奥平章子氏（青山学院大院生）の発表が特に印象に残った。

言語政策の観点から奥平氏が指摘する「ASEAN性」は、同じく複雑な言語地域で構成される欧州連合（EU）との比較を通して、より明確に感じられた。地域協力機構の規模・機能が拡大する一方、主権国家としての成立や国民意識の形成に至る歴史背景は加盟国によって様々である。そのため、例えば平等という言葉一つをとっても各国の理解に幅があるように、ふくらみのある意味をもつ概念を国際組織内で一律に定義することは難しい。国際コミュニケーションが緊密化する場面に

において、こうした状況は多彩な言語観を考慮した政策に反映されている。莫大な費用を負担して多言語主義を貫くEUと、英語を唯一の公用語として駆使するASEANが、一見正反對の手段を講じながら共に目指しているのは、言語使用における平等性ではないだろうか。既に国際語として普及した英語に「アジア英語」という性質を見出すことも、新しい言語観の表れと言えよう。全ての加盟国が英語という“common second language”を共有するASEANは、英語に内在する可能性を広げ、更に「アジア英語」であるからこそ生かすことのできる機会を活用しているように思われた。奥平氏の報告は、こうした「アジア英語」の在り方を再確認する上で大いに参考になった。

知的好奇心で満たされた場内は、藤田剛正氏による特別講演をはじめ、入念なデータ分析に基づく研究が報告される中、終始熱気に包まれていた。それは本学会の発足に先立ち、高本裕迅氏の招聘によって白百合女子大学で行われた本名信行氏の講演会が思い起こされるような雰囲気であった。“Better is the enemy of good.”という格言を掲げ、本名氏が多様な“World Englishes”について論じられたのは一年半前のことである。その余韻が残る会場で、今回再び“Asian Englishes”の最新情報から得られた充実感は、今後も大会が回を重ねるごとに増していくことであろう。

## 新刊紹介

### *Asian Englishes*

An International Journal of the  
Sociolinguistics of English  
in Asia/Pacific

(Vol. 1, No. 1)

ALC Press, Inc. (Tokyo, Japan), 174 pp.

竹下裕子（東洋英和女学院大）

アジア・太平洋地域の英語を社会言語学的に考察する英文専門雑誌が発刊された。本名信行編集長（青学大）のもと、エリック・ベレント（清泉女子大）、竹下裕子（東洋英和女学院大）、高本裕迅（白百合女子大）、田嶋ティナ宏子（白百合女子大）が編集にあたり、さらにアジア、アメリカ、オーストラリアの編集顧問17名が協力している。

*Asian Englishes* の主なテーマは、アジア英語の諸変種、アジア諸国における英語の社会的

役割と機能、英語がアジアの言語に与える影響、アジアにおける国際コミュニケーションと異文化間コミュニケーションの言語としての英語、など多岐にわたっている。

創刊号は論文(7本)、書評(3本)、カンファレンスレビューとエッセイを掲載している。シンガポールを中心に東南アジア全般の英語教育を考察するHo、国際語としての英語教育に第一言語の視点を組み入れる重要性を実証するLi、タガログ語と英語のコードスイッチングの例からフィリピン英語の語彙の拡張を試みるBautista、タイの英語教育史と現状を考察するSuphat、インドの英語政策を論じるParasher、日本における国際言語としての英語の方向性を示す本名・竹下、アジア5カ国の教科書を分析するBerendtと、いずれも上記のようなテーマを緻密かつ独創的な視点から扱った、先端的な論文である。

しんがりをつとめるのはLarry E. Smithである。彼は*Asian Englishes*の創刊を祝してエッセイを寄せたが、“English is an Asian Language”と題したそのエッセイの中で、彼は英語がアジアの言語である5つの理由を示し、英語の役割に対する理解を深めるための研究を続ける必要性を説き、「この専門誌*Asian Englishes*こそ、その分野の研究を発表するに相応しい場所である」と結んでいる。

編集長はエディトリアルの中で、アジアにおける多様な英語に関する情報や意見交換の場として本誌が活用されるよう、関係者に広く呼びかけている。*Asian Englishes*が会員諸氏のご研究に大きく貢献し、また優れた論文を発表していただく場となることを心より望んでいる。

## 【海外情報】

### アジア英語とコード混合

本名信行(青山学院大)

アジア英語の重要な研究テーマの1つにコード混合がある。アジア新英語の発展はアジアにおける多言語間接触の結果といえる。しかも、この言語接触は多方面で重層的に展開している。その様態を観察すると、いろいろなパターンがみられる。そこには、借用や適応のみならず創造のダイナミクスも働いているが、まず借用の観点から分析するのが教示的であろう。

アジア諸英語は現地の「言語と文化」の影

響を大きく受けている。これは発音や抑揚、そして語彙や表現に顕著にみられる。シンガポール英語でいえば、It's makan time. (makanはマレー語で「食事」)やYou wait here la. (laはマレー語の終助詞「ね」「よ」「さ」のように、土地のことが混じる。

このような現象は英語が国内コミュニケーションの言語となったところでは一様に生じており、興味がつきない。借用の源泉がはっきりわかる場合は問題を整理しやすいが、そうでない場合も多く、なかなか一筋縄ではない。特に、多言語が関連した統語混合の場合問題が複雑になる。シンガポール英語にみられる反復現象がこの一例であろう。私が街角で聞いた例にこんなものがある。(反復により副詞的意味が付加されることに注意)

- (1) If you go to Seiyu, everything is cheap-cheap. (タクシー運転手)
- (2) I like to wear big-big. (Tシャツの売り子)
- (3) Play-play, no money. Work-work, no leisure. Combination is better. (タクシー運転手)
- (4) Choose-choose-choose-choose-choose, no buy. (売り子)
- (5) Thursday, can-can. (レストランの予約係)
- (6) My friend from China, she likes (to) shop-shop. (クラーク)

このようなパターンは中国語の影響でもあるし、マレー語の影響でもある。どちらか一方というよりも、両方が合体して影響を及ぼしているのだろう。このパターンはシンガポール英語に深く根を下ろしており、外国人が簡単に真似のできるものではない。

1言語は独立した体系であるという考え方は幻想ではないだろうか。多くの場合、言語は互いに接触し、影響しあって発展する。このことはアジア英語のなかに確かにみられるのである。

## 事務局から

6月27日の第3回全国大会で会員総会が行われ、以下の議題について話されました。

### 1. 事務局の移動

事務局を青山学院大学から白百合女子大学に移動いたしました。今後のご連絡は以下に

お願いいたします。

182-8525

東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 英語英文学科 田嶋研究室内

日本「アジア英語」学会事務局

Fax: (03) 3326-4550

E-mail:tina.tajima@nifty.ne.jp

## 2. 理事等の選挙規定

本会は1999年まで発起人を中心とした現理事で運営し、本会の基礎固めを行う。理事等の選挙は2000年より行います。

## 3. 会則の変更

会則第4条の2行目を次のように変更いたしました。

(現) 本会の会員は、正会員、学生会員とする。

(新) 本会の会員は、正会員、学生会員、法人会員とする。

## 4. 学会紀要『アジア英語研究』発刊

学会紀要「アジア英語研究」(英文名称 Asian English Studies) を発刊することになりました。紀要委員は、まず理事が担当いたします。投稿規程は以下の通りです。会員の皆様にふるって投稿して頂きたいと思えます。

1 本誌はアジア英語に関連したテーマについて、研究論文、調査報告、書評、エッセイ等を掲載する。

2 本誌に投稿できるものは次の通りとする。

(1) 日本「アジア英語」学会の会員

(2) 上記以外の者で、編集委員会が特に委嘱したもの

3 本誌の言語は日本語と英語とする。

4 原稿はフロッピーディスク(1部)とハードコピー(3部)で提出するものとする。(機種はマッキントッシュか Windows)

5 原稿の分量は、研究論文・調査報告等の場合はA4横書き1行40字とし400行以内(400字詰原稿用紙 40枚相当)、書評・エッセイ等の場合は同100行以内(同100枚相当)とする。

6 編集委員会は投稿論文等の査読を行い、掲載の諾否を決定する。

7 投稿の締め切りは毎年11月末日とする。

8 投稿に関連した問い合わせ、ならびに送り先は学会事務局とする。

## 5. 第4回大会

第4回全国大会は、1998年12月19日(土)に豊橋技術科学大学(愛知県豊橋市)にて行います。

## 他学会からのお知らせ

### 発表論文および参加者を募集

#### ● RELC セミナー 開催 ●

RELC (シンガポール) は、1999年4月19日から21日までセミナー、Language in the Global Context: Implications for the Language Classroom を開催致します。

お問い合わせは:

Seminar Secretariat

SEAMEO Regional Language Centre

30 Orange Grove Road

Singapore 258352

Republic of Singapore

#### ● タイで国際会議開催 ●

チュラロンコン大学(タイ)は、1999年12月1日から3日まで、国際会議、ELT Collaboration: Towards Excellence in the New Millennium を開催致します。

お問い合わせは:

Professor Kanchana Prapphal, Ph.D.

Director

Chulalongkorn University Language Institute

Prem Purachattra Building

Phayathai Road, Bangkok 10330

Thailand

## 第4回全国大会 研究発表募集

第4回全国大会は、1998年12月19日(土)に豊橋技術科学大学にて行います。研究発表希望の方は、10月9日(必着)までに要旨(日英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて事務局までお送りください。

1998年9月15日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 高本裕迅

発行所 青山学院大学

国際政治経済学部

事務局 〒182-8525

東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学

田嶋宏子研究室内

TEL: 03-3326-5050(代)

FAX: 03-3326-4550

E-MAIL: tina.tajima@nifty.ne.jp